

第二十四章

古典主義

—ある古典主義者の肖像—

並木 幸充



ローマのマルクス・アウレリウス像

第一節 古典主義者ギツシング

中世イギリスの中等教育の中心であったグラマー・スクールでは、もっぱら聖職者の養成を目的にしていたため、ギリシャ語、ラテン語などの古典教育や、道徳的、知的能力養成のための教養教育が当然のように行われていた。ルネサンスの人文主義の時代からヴィクトリア朝時代に至っても、名門パブリック・スクールをはじめとする各種中等教育では、依然としてその実情に変わりはなかった。しかし、教育を受ける者の数が増加し、下層中産階級以下の子弟などが教育を受けるようになってくると、古典教育中心のカリキュラムは実用的価値があまりなく、生徒の実際の目的にもそぐわなくなってきた。一八三〇年代から、オックスブリッジの教養教育をイングランド北部のダラムやマンチェスターのカレッジに移植する試みもなされたが、その結果は惨憺たる有様だったらしい。比較的低い社会階級出身の学生にとっては、従来の古典教育などはまったく unnecessaryなものだった。ヴィクトリア朝も中期以降になると、ジェレミー・ベンサムの功利思想を発展的に継承したジョン・スチュアート・ミルや、ハーバート・スペンサーなどの影響もあって、次第に商業的実利や科学的知識の習得に比重が置かれ始め、とりわけ高等教育においては実用か教養かの論争が活発化していった。

ギツシングが学んだオーエンズ・カレッジ(図①)は、伝統的な一般教養教育もさることながら、実用的な学問や自然科学などの教育に力点が置かれる、当時新興産業都市に作られていった新しい大学の一つであった。¹⁾一八五一年設立のオーエンズ・カレッジは、古典教育に片寄らない幅広い教育課程を目指し、一八七〇年代以降にはとりわけ科学方面に優れた教授陣を誇っていたという(Roberts 22)。そうした流れの中で、下層中



図① マンチェスターのオックスフォード・ストリートにあったオーエンズ・カレッジ

産階級出身のギッシングは、まるで時代の潮流に逆行するかのようになり、古典、教養教育をこの上なく愛し、それに何よりも打ち込んでいった。

ギッシングが十四、五才の時に通った、リンドウ・グロウヴ・スクールは、当時の校長の方針から、数学と古典語の教育に熱心であったというので (Cousillas Alderley) Edge 9-10)、その時期に、本格的な古典学習に没頭するようになったようだ。学生時代ギッシングが、「科学への関心をほとんど示さず、あらゆる種類の理論的思想を毛嫌いした」(Roberts 22) というのは必ずしも正しくないが、彼が従来型の古典、教養教育で目覚ましい成果を挙げていたのは事実であった。作家ギッシングの特殊性は、生来の資質の面で古典、教養という従来型価値観に強く引かれていた一方で、「彼が最も尊敬した古代の作家たちに精神的に相反する、社会的リアリズムといったタイプの文章を書くこと」(Collie, *Biography*, 16) に生涯打ち込んでいかなければならなかった点にある。従って、社会の現実を直視する際にも、古典主義者のな視点が導入され、古典を通じて養成されたものの見方や発想がギッシングの作品の随所に見られたりする。そしてその古典主義は、二つの顕著なタイプに分類できる。一つは「スラムの生活」と「古典・古代」の二つの大きな関心を持った「活発な社会的良心を持つ愛書家」(Cousillas, *Collected Articles* 170) として、作中人物の中に作者の古典嗜好が注入され、その結果として、『無階級の人々』(一八八四年)、

『ネザー・ワールド』(一八八九年) から『三文文士』(一八九一年)、『埋火』(一八九五年)、『渦』(一八九七年) に見られるように、「ギッシングの小説の最高のものは教養ある学徒に現代世界が与える衝撃の研究」(Garp 162) となるタイプである。もう一つは、とりわけ晩年に実現された、古典・古代そのものを題材にした具体的作品の創造という型である。

最初のタイプの顕著な特徴は何と言っても、当時の高等教育の潮流を反映したかのような、古典主義的発想と功利的、実利的発想の対比、対立にあると言える。更に言えば、作者自身にとっても、そしてその作中人物たちにとっても、古典は基本的には、いまわしく、わずらわしい「現実生活から逃避するまさに本当のよりどころ」(Garp 166) として捉えられていたようである。しかし晩年になると、古典主義的傾向を作品内に反映させていく際、描かれる作中人物は、それまでに提示されていた、現実逃避的古典愛好家像とは微妙に異なってくる。そしてとりわけ興味深いのは、晩年の作品に提示された古典主義者の肖像と、古典そのものを題材にしたエッセイや小説の中で具体化された作者の問題意識とが、共通の認識を示していることである。つまり、ギッシングは、実に控えめにはあるが、古典や教養というものを当時の実利社会、功利的社会から逃れる避難所としてばかりではなく、むしろそうした非人間的社会にこそ必要な精神的支柱のようなものとして作品内に投影しようとしたように思われる。

もちろんギッシングは、一八八三年時点でも生産の目的を金儲けではなく人間に役立つように考える、ジョン・ラスキンのポリティカル・エコノミーに共感していたのは事実である(Letters 2: 134-35)。だが弱者を救済する施策に積極的に賛同したわけではないし(Kope 56)、その後少なくとも一八九七年頃までは、「貴族的視点、読書に時間を注ぎ、日常的世間から遊離する上流の理想」(Gapp 172)を目指す貴族主義的な傾向を示し続けたことは否定できない。ジェイコブ・コールゲの指摘するように、ギッシングの態度に変化が見られるようになるのは、カラブリア旅行中に粗暴でみすばらしい外見の庶民が、本質的に「親切で友好的」であることに気づくようになってからである(Cousillas, *Collected Articles* 177)。それ以後の諸作品には、古典や教養の捉え方に歴然とした変化が見られるようになる。

『我らが大風呂敷の友』(一九〇一年)の主人公タイス・ラシユマーや、短篇「クリストファーソン」(一九〇二年)などでは、今まで肯定的に描かれてきた古典的教養の持ち主が、客観的に見ると、反民主主義的で利己的に映るさまが示されている。知性も教養もあるラシユマーは、ロンドンの貧しい人間には我慢がならない反面、彼自身も確固たる経済的基盤を持っていない。そこでラシユマーは、生物器官や組織の形成と同様、社会においても個々人のつながりは、それを指導する組織体である政府と呼ばれるものによって、ゆっくりと形成されていく(第二章、という進化論的「生物社会学」の理論を剽窃し、政界に

打って出ようとするが、その偽りや偽善が暴露され、結局アイリスという未亡人との地味な生活に入っていく。この小説の「マゾヒズム的自己批判」(Kope 137)としての側面は、短篇「クリストファーソン」にも見られる。ちょうどチェーホフの「殻に入った男」の独断的古典志向の教師と同様に、自己中心的なラシユマーやクリストファーソンの姿が浮き彫りにされている。

古典の世界に沈潜していく古典主義を現実逃避的、現実否定的に捉えるのではなく、現実の世界に欠けている、必要とされるべき精神の現われとして捉えようとの試みもある。『イオニア海のほとり』(一九〇一年)の語り手や『我らが大風呂敷の友』のデймチャーチ、『ヘンリー・ライクロフトの私記』(一九〇三年)に見られるように、俗世間を離れ、古典に浸る一見従来型の古典主義者のポーズをとる人物像が、その典型的例である。デймチャーチには明らかに遁世志向があるが、彼は何か果たすべき責務があると考え、人との交わりを絶たないでいる。「人は自分が属する社会から切り離されては無に等しい。共通の善というものが我々の行動基準の第一に来るべき」(第四章)だと主張したマルクス・アウレリウスを信奉する。そして小説の後半で、デймチャーチは荒れ果てた庭を自ら手入れをして汗を流したあと、そうした仕事は「万人の務め」(第二十八章)であると感じ、何か爽快な気分になる。形而上学や社会学の本に浸るより、「最も身近にあるもの、自分のものと呼べる土地

の片隅から、人のために食べ物を生み出すべく最大限努力すること」(第二十八章)が自分の第一の責務と考えるようになる。そこには孤立した古典主義者の肖像はない。

続いて執筆された『ヘンリー・ライクロフトの私記』の主人公にも同じことが言える。その本の序文の中で、ロンドンを去り、デヴォン州に隠棲するライクロフトは「文筆業に対して決別の意を表し」、二度と文章を公にはしないと「編者」に語ったという。もしそれが事実なら、「過ぎ去った日々到我々が交わしたやりとりよりも生身の姿をさらけ出す」(序)文章を、何故執筆したのであるか。また「春」の冒頭で、一週間以上ペンを握らなかつただけで、どうしてペン軸が彼に対して恨めしそうにしていると感じるのか。ペン軸は生活のためにやむを得ず手に取った、いわば「仇敵」に等しいのだから、好きな読書に打ち込み、まわりの自然を愛する生活に専心して、書くという行為などは忘れられてもいいのではないか。「自分が書いてきたものは一ページでも今後残るに値するものはない」(「春」第一章)と感じ、ペンで生計を立てるといった不安定な仕事を若い人間に促すのは犯罪に等しい(「春」第十八章)とまで断じているのに、どうして今さら自分自身について書き残したり、ペン軸のことを意識しなければならぬのか。「編者」自身が述べているように、この文章に「人間的興味」(序)があるとするれば、それはライクロフトが、通世的志向を示しつつも、他人に対してより寛大に接し、人間らしい自己の形成を願っていたからだろう⁴⁾。

貧しい人々に対して「同情的なばかりでなく、更に重要なのは、彼らに敬意を表し愛情を感じている」(Constans, *Collected Articles* 177)からであろう。ある意味で、ライクロフトは、自分の経験知見を告白することで、それを読む未知の人間との交わりを密かに求めていたのではないだろうか。

第二節 古典・古代の追究

では以上の点が、古典主義者ギッシングが最も重きを置いた側面、システマティックな研究に基づく、古典・古代の再現を試みる創作活動とどのように結びつくのか考えていこう。ギッシングが最初に系統的に歴史に打ち込んだのは一八七九年一月頃と思われる。「事実」という健全なる土台に基づいて考えたり行動したりしなければならぬ。成し遂げられてきたことの歴史、そしてその根底をなした思想の歴史など、われわれの歴史を知らなければならぬ」(Letters I: 14)とし、イギリスやヨーロッパ、そして古代の歴史を本格的に読み始めていく。弟や妹に、英国史なら先ずマコーリーなどで歴史の一般概念を把握することを勧めた(II: 24, 103, 284)ように、段階的に何を読むべきかをあらかじめ決めていたことがわかる。特にギッシングの関心はギリシャ・ローマ史、英国史、そして教会史などに向けられていた。一八八一年十月には、ギリシャ・ローマの歴史を読むこと以外の知的労働はないと述べ(Letters 2: 62)、一

八八五年八月には、ミルマンの『ラテン・キリスト教史』（一八五四～五五年）を手にして、自分の決定的とも言える教会史への関心の根底にはローマ帝国の衰退の問題があることをはっきりと告白している（2334）。

歴史の研究は創作への構想につながっている。一八八一年一月十七日の書簡では実際にペロポネソス戦争末期のギリシャ史を題材にした歴史小説を書くことを願望している。ギッシンダが最もギリシャ語に打ち込んだのは一八八七年から九一年頃だが、イタリア、ギリシャ旅行が終わってまもなくの九一年十月の日記に見られる「いざれ書くことになるギリシャの話について考えた」(Letters 2: 259) という記述もその意欲の現れかもしれない。しかし具体的に実を結ぶことになる歴史研究の時期は、一八九五年の夏以降である。六月二十日には、ギボンでアリウス主義の問題、おそらく『ローマ帝国衰亡史』（一七七六～八八年）の第二十一章で扱われている異端の問題に触れ(Diary 377)、二十三日にはモンタランベールの『西洋の修道士』（一八六一～七九年）で四世紀の教会史(Letters 5: 352)、二十六日にはメリヴェイルの『帝国時代のローマ人』の一、二章(第四十一章のローマでの生活の記述などか?)を読んでゐる。そして二十八日以降には、ホジキンの『イタリアとその侵略者』の第一巻から第三巻に入り、四世紀の西ゴート族のイタリア侵略から、四一〇年のアラリックによるローマ略奪、オドアケルによる西ローマ帝国の滅亡(図②)、そして東ゴート族のテオドリクスの



図② 古代ローマ公共広場(フォルム・ロマーヌム)の跡

イタリア統治、更に彼の死後、孫のアタラリックを補佐するテオドリクス王の娘、アマラスンタによる摂政時代と五三五年の彼女の殺害までの流れを、詳細に頭の中にインプットしたと見られる。この時点の四～六世紀のローマ史研究には、より創作への具体化が感じられてくる。『ヘンリー・ライクロフトの私記』の中で、歴史に魅かれる理由として、「悪夢のような恐怖」「苦痛のうめき声の連続」とも言える歴史、「人間を苦しめてきたあらゆる事柄は同じ人間にとって実に興味深い」(「冬」第十

七章) 点が挙げられているが、ギツシングにとつて歴史は、成立、形成、発展の物語というより、衰退、混乱、滅亡の過程として関心をそそられる領域だったようだ。五世紀、六世紀前半のローマ史はローマ帝国やゴート王国の衰亡という歴史上の大きな転換の時期であり、小説としてはまさしく格好の題材だったように思われる。では、このような詳細な古典・古代研究とギツシングの古典主義の精神はどのような形で結びついたのであるうか。それを確認するためには、『ヴェラニルダ』(一九〇四年)という歴史小説によつて、ギツシングは何を表現しようとしたのか、そしてそれはヴィクトリア朝の歴史小説の中でどう位置づけられるのかを考える必要があるだろう。

第三節 歴史小説というジャンル

十九世紀という時代は、マコーリーの『英国史』(一八四九～五五年)がベストセラーになり、J・R・グリーンが幅広い読者層のために『イギリス国民の歴史』(一八七七～八〇年)を執筆し、「歴史に関する著作が途方もない人気を得た時期」とされ、とりわけ当時における中世に対する関心の高さは現代の歴史学においては議論の余地のない事実とみなされている。この時代を代表するブラウニング、ペイター、ラスキンらもルネサンス時代への関心を皆一様に示していた(Koger 130)。小説ではスコットが人気を博し、イギリスのみならずヨーロッパの歴

史文学に多大な影響を与えた。十九世紀に歴史小説が勃興していった要因として、社会的には「ナショナリズム、産業化、革命」などにより、「自分たちの歴史的連続性やアイデンティティを意識するようになり、それを勢いよく主張していった時代」(Fleishman 1) だったことが挙げられる。マコーリーは一八二八年五月に『エディンバラ・レビュー』誌に発表した「歴史」というエッセイの中で、「完全なる歴史家は自分の記述する話を感動的で絵画的に語るだけの十分強力な想像力を持つていなければならぬ」(Macmillan 236) とし、ヘロドトスをその意味で最高の歴史家として挙げ、「歴史を書くのに必要な才能は偉大な劇作家の才能とかなり類似するものだ」(ibid.) と主張している。

では、ギツシング以前の十九世紀歴史小説の特徴は具体的にどうだったのだろうか。そのジャンルの確立者とも言えるスコットに関して、「環境が人間の意識を形成するという認識」がスコットの独創的な革新とされ、「人間や社会の性質についてのスコットの理解が及ぼした衝撃は、ヴィクトリア朝の小説を社会的リアリズムに向け、思想家たちに社会的責任をより大きく認識させることになった」という意見や、「経済的、社会的転換を人間の運命や登場人物の心理の変化に即して描きあげるスコットのすぐれてリアリスティックな歴史描写に感嘆させられる」というルカーチの意見、また、「動きより場面に、アクションより風俗やセッティングに多くの関心を払っている」と

いう指摘など、総じて時代風俗を映し出す鏡のような側面に比重が置かれている。しかし一八三〇、四〇年代には、歴史小説は一種の現実逃避的作品がもてはやされた⁸⁾。エインズワースはその典型的例で、「現代の現実から逃避を希求するロマン主義的傾向の産物」(Sandlers 32-33)とされる。一方スコットの直接的継承者と考えられるブルワーリットンは、一八四八年出版の『ハロルド』への序文で、歴史の力を借りて「信頼できるが顧みられなかった記録から、また、訪れるものもほとんどない遺物の倉庫から、無味乾燥な事実の羅列(一般の歴史家ならそこだけに終始してしまうだろう)を活性化させる出来事や細部を取り上げる」¹⁰⁾試みについて語っている。スコットとは異なり、ブルワーリットンは風俗習慣には関心を示さず、「歴史小説を書くというより壮大な歴史劇を書いた」(Santagata 199)と言われる。

ニコラス・ランスによると、一八四八年は歴史小説の展開の上でも重要な年で、この年を境に「たいていの主人公は偉大な人物というより、自分たち自身の私的な経歴を持った一個人となつていく」(Rance 13)という。ウィルキー・コリンズの『アントニナ』(一八五〇年)はこの時期の典型的例の一つかもしれない。コリンズはその処女作への序文で、アラリックによるローマ攻略というローマ帝国史上最もショッキングな事件を題材にしているのに、主要人物が歴史上の人物である必然性はなく、もっぱら想像力で話の必要に自在にあわせて人物を作ることが

できるとしている¹¹⁾。事実、同時代の『アセニアム』誌の書評でも、学究的にも古物研究の正確さの面でもブルワーリットンらに劣るとされているが、作品を一読してみると、確かに異教徒アルピアスなどのエピソードの方に歴史的事件以上の迫真性があるように思われる。ヴィクトリア朝中期以降では、サツカレーやデイケンズが、大きな歴史的事件と「個々の人物がどのように反応するかというドラマの結合」をメインに据え、「個人個人の内面的生活が自立性をもち歴史的状况を背景や枠組みに変えてしまう」(Feistman 149)ようになっていったという。またこれ以降の主要な歴史小説、『僧院と炉辺』(一八六一年、『ロモラ』(一八六三年)、『ジョン・イングルサント』(一八八一年)、『快樂主義者マリウス』(一八八五年)などには主人公の内面的問題が扱われ、そのことはヴィクトリア朝後期の「宗教的懐疑」、精神的発見の探求、そして「イタリア文化への熱狂」などと無関係ではないとされる(Feistman 149-50)。一八四八年のブルワーリットンの『ハロルド』以降、「歴史小説は一八五〇年代には宗教的プロバガンダを伝えるものになり、次の六〇年代には政治や社会についての一般の見解を伝えるものになった」(Rance 105)という意見はいくぶん極端な見方かもしれないが、核心をついていることは間違いないだろう。

以上の大まかな流れを踏まえて、次に、ギッシング自身は十九世紀の歴史小説をどう見ていたのか考えていこう。先ずスコットに関しては、作家としては「むしろ危険なモデル」

(*Letters*: 179)と考えていたらしい。作中に長々しい議論を展開したり、「現代ではとても必要な人物の心理分析をどちらかと言えばあまり知らない」(1:180)との批判から見ても、少なくともスコット流の歴史小説を目指していなかったことは確実である。他に記録として確認できる主要なものは、キングズリーの『西へ!』(一八五五年)と『ハイペイシア』(一八五三年)、ブルワーリットンの『ボンペイ最後の日』(一八三四年)、ペイターの『快樂主義者マリウス』、そしてジョージ・エリオットの『ロモラ』である。キングズリーの『西へ!』の方は一八八七年三月に読んでいるが、この作品の戦闘や冒険に満ちたストーリーの展開を「少年向けの本」(*Letters*: 3: 96)とし、その作家の「意識的攻撃精神」(3: 101)を敬遠し、「私は最大限、人物はもっぱら人間として判断し、事物はもっぱら事実として判断しようと努めている。純粹に芸術的という以外の特定の見方をとらない」(3: 101)と、はっきり作家としての立場の違いに言及している。『ハイペイシア』については、初め「非常に見事な歴史絵巻と部分的には強力なドラマ性」(3: 101)を評価していたが、一八八九年十一月に再読した時、「この本に対する関心は完全になくなった。単に未熟だったから初読の際面白く感じたのだ」と日記に記し、「技術面での弱点は際立つ。ハイペイシアの描写は貧弱で、生き生きとした古代生活の描写は皆無」(*Diary*: 181)を理由としてあげている。ギッシングがこの小説に初め興味を覚えた理由は明白である。題材がキリスト

教徒と異教徒の対立で、舞台がローマ帝国支配下のアレキサンドリアなので、彼自身のローマ史やキリスト教史への関心とかなり密接に重なるからだ。しかし作品自体は退屈だし、登場人物はみな平板で、結局作者の政治的メッセージが透けて見えて感心しなかつたのであろう。ブルワーリットンとペイターの作品はそれぞれ一八九八年一月三十日の日記と、一八八五年七月七日の書簡で確認できるが、作品を批評したコメントは残されていない。重要なのは最後の『ロモラ』である。ギッシングは歴史小説としての『ロモラ』にはかなりの敬意を払っていた。先ず一八八二年七月の手紙で、「すばらしい本だ。想像力と確固たる教養の結びつきが見られる」(*Letters*: 2: 93)と述べ、一八八五年十月には、「それはとても注意して読むべきだ。ルネサンス時代のイタリアの姿をどの歴史にも劣らず見事に与えてくれる」(3: 32)と述べている(図③)。

以上のギッシング自身の言及から、彼の目指した歴史小説が、スコットやエインズワース、キングズリーなどの歴史小説ではなく、人物を人間として捉え、事実を事実として踏まえながら、取り上げる時代を想像力豊かに忠実に再現する方向にあったことが読み取れる。そしてこれは、実際にジョージ・エリオットが「歴史の想像力」というノートブックに残したエッセイの趣旨とほぼ一致している。その中でエリオットは、歴史的記述において従来から行われてきた「学理上の観点からの嚴肅な歴史的な抽象的取り扱いとは違う、通常の歴史小説の絵のような



図③ 『コーンヒル・マガジン』に連載時の『ロモラ』のイラスト

配色とも違うもの⁽¹⁴⁾、つまり、「あらゆる範囲の証拠を使い、注意深い類推的創造によって欠落を補いながら、政治的、社会的な変化に至っていくさまざまな段階を詳細に考え出す」(Priny 26)という「真実を語る想像力」で構築された歴史小説を書きたいと論じている。キングズリーの『西へ!』を論じた一八五五年七月の『ウェストミンスター・レビュー』誌でも、図らずもギッシングと同じ趣旨の評言が見られる。公正な見地からジョージ・エリオットはこの作品の長所と短所を述べているが、情景描写の美しさを何よりも評価する一方で、キングズリーがしばしば陥る説教を振りかざす人物の描写を抑えないと、「真に人間らしい人物は創造できないし、本当の歴史小説を書くこともできない」(29)としている。この指摘は、攻撃的な精神と人間創造の欠如を指摘したギッシングのキングズリー批

判と同種のものと言えよう。

但し両者の歴史小説には大きな違いがある。エリオットは歴史家と同じように細部を念入りに描くことで、「個々人の行動を社会の枠組みで見よう」(Fleishman 158)と試み、当時の「フイレンツェ社会の実質を具現化する」(28)ため実に退屈な床屋の社会も描いている。ギッシングも詳細な描写を試みたことは論を俟たない。しかし、エリオットの欠点は、背景は具体的で表現力に富み、人物は個性的で興味深い反面、人物同士の関係はまだしも、人物と「背景」の関係には必然性がないのだ(29)。「プロットの展開においても、別の時代の別の場所でのことにはなり得ないというものがなく」(26)、作品やヒロインからはコントの実証哲学や、フォイエルバッハの精神の軌跡が見られるなど、アナクロニズムの要素が否定できない(Sanders 177)。十六世紀のフイレンツェに舞台を設定したのも、「自分の目的にかなう歴史的状況の中で具体的に自分の理想を実現に移せると考えた」(Santangelo 179)からかもしれない。ヒロインのロモラは、「その時代の精神を注入されているのではない。彼女の選択は十九世紀の道徳性に導かれ、彼女が問題を解決するさまは、実証的であるからだ」(202)、という見方は否定しがたいであろう。ある意味でこれは、過去の素材を使って現在の政治社会問題を論じるブルワーリットン(Dahl 20)や、キングズリー、ワイズマン、ニューマンらが歴史小説をオックスフォード運動やカトリック信仰を論じる手段に

したのと同系列と言っている(Prince 49)。だが、ギッシングの場合はその逆であったように思う。むしろその歴史小説の特徴は、ギッシング自身が手紙の中で「まずまずいいものができると思う。その時代の精神に浸りきっているからだ」(Letters 9: 95-96)と述べているように、作品の前景においては、一見現代小説のようなテーマと人物造型の意匠をこらしながらも、その後景では作品の真の主人公に具現化されるように、扱う時代の時代精神およびその時代の典型的人物を忠実に再現することにあつたように思われる。

第四節 『ヴェラニルダ』の生成

ギッシングが『ヴェラニルダ』執筆の準備に入つたのは一八九七年春で、途中のイタリア旅行を含め約一年間念入りな研究を行い、実際の執筆は一九〇〇年十二月から翌年四月頃までと、その後中断をはさんで一九〇三年七月から十一月頃まで続けられた。この二つの執筆の時期の相違は作品の構想自体にも変化をもたらしした。当初の構想と実際の『ヴェラニルダ』との違いの中に、作品創造上の重要な問題があるように思われる。構想のきっかけは一八九七年四月頃、グレゴロヴィウスの『中世ローマ市の歴史』(一八五九―七二年)の第一巻を読んで「歴史小説のよい着想を得て」、「カッシオドールスの作品を手に入れて、使える材料を書きとめながら、十二巻を非常に丁寧に読んだ」

(Diary 65) 時である。グレゴロヴィウスがカッシオドールスにつながる理由は明白で、それは『中世ローマ市の歴史』という本の顕著な特徴、同じ歴史書でもホジキンとははっきり異なる史観から容易に推察できる。第一巻は五世紀初め頃から五二二年ゴート戦争が終わる頃までのローマ市の歴史を記している。単なる政治史ではなく、異教とキリスト教が結びついたローマ市の二重の性質に触れ、更にローマ帝国の滅亡はラテン民族に新しい血と精神をもたらししたチュートン主義の確立と捉え、「人類がそれまで受け取つた中で最も大きな恩恵の一つ」(Gregorovius 253)と述べるところに、いかにもドイツ人歴史家の史観が出ているように思う。更に、その「新しい血と精神」が東ゴート族の王テオドリクスによつてもたらされ、それが彼に仕えたローマ人で、古代文明を代表するカッシオドールスの間に最初の麗しい和合を見たと言っている(99)。そしてその和合を余すことなく伝えているのがカッシオドールスの『諸文書集成』(五三八年頃)十二巻である。

この本はカッシオドールスが公職についていた時から晩年に至るまで歴代の王や自分自身の公文書や書簡をラテン語で記した文書だが、この中の前半で特に目を引くのは、テオドリクス王の名で出された書簡の中にしばしば見られる、寛大さ、高潔さ、抑制の精神、法や正義、忠実さや誠実の美德、争い事を嫌い和を重んじる精神などである。この十二巻を「ペンを片手に極めて注意深く読み通した」後、「小説についてのすばらしい

構想がある」(Letters 6: 301)と述べているのは示唆的である。ギッシングはこの本と平行して、五月にはマンゾの『イタリアにおける東ゴート王国の歴史』(一八二四年)を読み、六月十三日からはテオドリクス王の統治期間を記したホジキンの『イタリアとその侵略者』(一八七九〜九九年)の第三巻を再読している。四月六日時点での構想では、「聖ベネディクトゥスとカッシオドールスが共に効果的に登場する」(6: 303)とし、六月十五日には自分が取り扱いたいのは「キリスト教の理想と古代ローマ人の精神の葛藤」(6: 302)だと述べている。「その時代にとっても有益だ」(6: 327)とするレッキエーの『ヨーロッパ道徳史』(一八六九年)には、禁欲的修道士の「真の自己犠牲と自己放棄の精神」が評価され、ローマ帝国崩壊の際には「犯すべからざる聖域と平和な労働の中心地が何よりも重要なもの」として聖ベネディクトゥスの修道院が挙げられているが、これもギッシングのテーマの発展に貢献したに違いない。

しかし、一九〇〇年十二月に執筆を開始した時点では、必ずしも十分なテーマの展開が構想されてはいなかったようだ。ギッシングは「一ヶ月を費やしてストーリー全体の入念なプランを練った」(Letters 8: 120)と¹⁸⁾言うが、一年半ほどの中断のあと、一九〇三年七月十日の書簡ではつきり「本来の計画を大いに改善した」(Letters 9: 100)と述べているからだ。人物設定や扱う時代の期間、それにストーリー自体などもかなり変えられたが、最も根本的な改変と言えるのは、前景と後景の導人にあつたよ

うに思われる。最初のプランでは、そのストーリーの性格上、歴史上の人物と、架空の人物が最初から最後まで交わりあい、ギッシング自身が「叙事詩的調子」で「ロマンスを目指してあちこち進んで史実を変えた記述」(Letters 6: 327)に驚いた、ダーリンの『ローマをめぐる戦い』(一八五九〜七六年)と、本質的には同じ記述にならざるを得なくなる。¹⁹⁾そうすると作品は結局、宗教やローマ人の精神の問題などより、五四〇年から五四六年までを背景にした年代記的歴史恋愛小説になっていったであろう。その場合、現行版に比べて、史実と虚構が適切に交われれば、「バジルは根本的に興味を引かない人物なので、人間研究としてはあまり目を見張るものではない」(Korg 257)と批判される主人公の魅力のなさは回避できたかもしれない。しかし、プランの変更によって、ギッシングは作品の展開により一貫性を持たせていったように思われる。

この点の変更に伴う叙述方法の変化と人間関係の見直しの中に読み取ることができよう。第一に、『ヴェラニルダ』に顕著な叙述法は、第一章、第十六章、第十八章、そして第六〜七章、第十三章に典型的に出ているが、歴史上の人物に言及する時は、歴史家が歴史を記述するように叙述するか、登場人物の間でうわさとして流すかのどちらかで、作品の前景には出てこない。ゴート族の王トテイラが人物として登場するのは第二十七章になって初めてで、それまでは完全に作品の後景に置かれている。ギッシングという作家は、『余計者の女たち』(一八九三年)や

『我らが大風呂敷の友』などに歴然と見られるように、時として叙述以上に人物同士の会話や議論を中心に組み立てて、彼らの葛藤を描くことを得意としたが、当初の構想では、ヒロインの恋愛の対象だったトティラを、完全に作品の背景に押しとどめるように変えてしまったわけだ。その意図は、第二十七章以前のトティラの記述（例えば第七、第十六、第十七章等）がほぼすべて彼の寛大さ、気高さ、公正さを述べている点、また第二十七章のバジルとの会見で彼が示す卑怯や偽りを憎む点、そして第二十九章で、ティプールの住民が皆殺しにあらう（ヒロインがトティラへの思いをなくすきっかけとなった）重大な事件も、「まわりの者たちの疲労を感じ、また明らかにそうした状況の圧迫を受け、戦争のあらゆる重みを自ら担っていて、ティプール市への野蛮な復讐を命じ、あるいは承認していたのだ」（第二十九章）と弁護的書き方をしている点から見ても、「来るべきヨーロッパ七〇〇年の文明人の日常生活の規則」(Hobbskin 140)を定めたベネディクトゥス(図④)より、むしろトティラをこの小説で文字通り、「偉大なテオドリクスの後継に足る人物」(第二十九章)として、六世紀イタリアのゴート王国時代の精神を典型的に示す人物として、捉えるところにあったようだ。小説の前景はこの精神を浮き彫りにする対照的世界として捉えられていたようである。

従って、第二の点として、小説の前景に立つ人物たちには、まるで意図したかのように、宗教的偏見、陰謀、裏切り、不信、



図④ ベノゾ・ゴッツォリ『聖ベネディクトゥスに対面するトティラ』(15世紀)

嫉妬、殺害を軸にプロットが構築されている。最初のプランでも裏切りや嫉妬は構想されていたが、マーシアン像に示されるように、現行版では更にそれがすべて主人公バジルのめぐって有機的に機能している。ベネディクトゥスの口を借りて、ローマ衰退の原因は「自国の有益さのために自分の欲求を抑える術」(第二十五章)を失ったことに帰せられているが、マーシアンが友を裏切るのも、またバジルが殺害を犯すのも、共に昔のローマ人の美徳を失ったからとも言える。だからこそ二人は、立場

の相違を超えて、その美德をローマ人以上に有するトティラに希望を見出すのであろう。ここに至って『ヴェラニルダ』は、『ローマをめぐる戦い』のようなドラマティックな歴史小説や、また作家自身が意識する同時代の政治、社会、思想を反映させる歴史小説とも異なる、現代小説風のストーリー展開の背後に六世紀中葉の典型的時代精神を映し出す、独特の歴史小説になったと言える。そしてこの時代の理想的精神の中に、古典主義者ギッシングの晩年の思想の典型的例の一端が垣間見えるであろうし、またその部分に、十九世紀イギリス社会に対する作者の強烈な批評性が認められる。

ギッシングは、一八八〇年代にヴィクトリア朝社会の現実を小説の中で取り扱っていた時、社会問題そのものを訴えかけるより、芸術的にそれを表現することを優先させ、「人間の生活は芸術的表現の材料として以外は、あまり私の関心を引かない」(Letters 2: 223)と述べ、個人的な主観は交えない、ナチュラリズムの作風を重視してきた感があった。しかし、その晩年の作品のあちらこちらで、そうした客観性の殻を突き破って、作者の生の声をそこはかとなく鳴り響かせ、ヴィクトリア朝社会が失いつつある精神の必要性を暗示しているようにも思われる。

註

(1) 以上は主に次の本の解説による。Richard D. Altick, *The English Common Reader: A Social History of the Mass Reading Public 1800-*

1900 (Chicago: U of Chicago P. 1957) 173-87, M・サンダーソン『イギリスの大学改革、一八〇九〜一九一四』(安原義仁訳、玉川大学出版部、二〇〇三年) 五三〜一四二頁。ヴィヴィアン・グリーン『イギリスの大学——その歴史と生態』(安原義仁・成定薫訳、法政大学出版局、一九九四年) 三八〜二六八頁。

(2) この点に関しては、小池滋訳『ギッシング短篇集』(岩波文庫、一九九七年)の解説で、訳者がすでに明確に指摘している。またGapp 135も参照。

(3) 『イオニア海のとおり』に関しては、拙稿『イオニア海のとおり』——ギッシングの『詩と真実』『ギッシングの世界』(英宝社、二〇〇三年)の二二三頁を参照。

(4) 例えば、それまでの孤独な生活を少しも後悔していないにしても、他人に対して不寛容だった過去の自分に思いをめぐらしたり『秋』第五章)、またマルクス・アウレリウスを読む際、その哲学よりその人となりに触れるためである(『秋』第十三章)としているのもその現れのように思われる。

(5) 一八七二年オーエンズ・カレッジで「英詩賞」を受賞した、五世紀頃のラヴェンナ市の栄光と衰亡を歌った「ラヴェンナ」という詩にも、その傾向ははっきり認められる (Posinus, *Poetry of George Gissing* 16-26)。

(6) ステファニー・バーチエフスキー『大英帝国の伝説』(野崎嘉信・山本洋訳、法政大学出版局、二〇〇五年) 五五頁。また「建築においてゴシック様式の復興、芸術におけるラファエル前派運動、政治におけるテイズレーリによる若い英国運動、そして宗教におけるオックスフォード運動」などがヴィクトリア朝を中世主

- 義の時代として彩られたよう。Avrom Fleishman, *The English Historical Novel* (Baltimore: Johns Hopkins UP, 1971) 29. 似た同種の意見は Arnold Hauser, *The Social History of Art*, vol. 4 (1951; London: Routledge, 1999) 103 にもある。
- (7) Thomas Babington Macaulay, "History," *The Complete Works of Thomas Babington Macaulay*, vol. 3 (New York: Sully and Kleinteich, 1900) 89.
- (8) Andrew Sanders, *Victorian Historical Fiction* (London: Faber, 1981) 8. シェルジ・ルカーチ『歴史小説論』(伊藤成彦・菊森英夫訳、白水社、一九六九年)八九頁。Gennar Santangelo, "The Background of George Eliot's 'Romola,'" *diss.*, U of North Carolina, 1962, 185 などを参照。また人物の内面的複雑さを描いていながらそのスロット批判に対して、「偉大な歴史小説では、人物と物語の連続は歴史のプロセスを説明するもの」で、個人の心理を示すためにプロットなどが構築されれば、「歴史的焦点がはやけてしまう」との観点でスロットを理解する意見もある。Harry E. Shaw, *The Forms of Historical Fiction* (London: Faber, 1983) 35-49.
- (9) Nicholas Rance, *The Historical Novel and Popular Politics* (London: Vision, 1975) 38.
- (10) Edward Bulwer-Lytton, preface, *Harold. The Complete Works of Edward Bulwer-Lytton* (New York: Thomas Y. Crowell, n.d.) 3. 同様の見方は Curtis Dahl, "History on the Husings: Novels of Politics" in *From Jane Austen to Joseph Conrad*, ed. Robert C. Rathbun (Minneapolis: U of Minnesota P, 1958) 60-61 にも参照。
- (11) 例えば、ローマ包圍の場面でも、作者は当時のローマを描写する
- ことに關して、「好古趣味的地形描写や昔の建築などは、もっと筆の立つ方にゆたわたり、読者の好きに任せよう」と述べられている。Wilkie Collins, *Antonina. The Works of Wilkie Collins*, vol. 17 (New York: Collier, 1901) 68.
- (12) Norman Page, ed., *Wilkie Collins: The Critical Heritage* (London: Routledge, 1974) 41.
- (13) 弟のウィリアムは一八七八年四月の時点で「ボナムイ最後の日」の詩的散文をキッキングに任せているが、キッキング自身のその作品の初説は一八九八年一月である。その事実からみて彼のその小説への関心の程度は高くなかったようだ。
- (14) Thomas Pinney, ed., *Essays of George Eliot* (London: Routledge, 1963) 447.
- (15) Ferdinand Gregorovius, *History of the City of Rome in the Middle Ages*, trans. Gustavus W. Hamilton, vol. 1 (London: George Bell, 1900) 114-15.
- (16) Magnus Aurelius Cassiodorus Senator, *The Variae*, trans. S. J. B. Bannish (Liverpool: Liverpool UP, 1992). Cf. 6, 8, 12, 16, 19, 28, 32, 46, 48, 51, 54, 58.
- (17) William E. H. Lecky, *History of European Morals* (1869; New York: George Braziller, 1955) 155, 183.
- (18) 詳細は George Gissing, *Veranilda*, ed. Pierre Coustillas (Brighton: Harvester, 1987) [xvii-lxxxiii: 44-45] Thomas Hodgkin, *Italy and Her Invaders*, vol. 4 (1879-99; Oxford: Clarendon, 1928) 326-500 にも参照。
- (19) Felix Dahn, *A Struggle for Rome*, trans. Herb Parker (1859; Tübingen: Athena, 2005) およびヘウイティゲスと女王メタスエ

ンタの悲恋のドラマはその最たる例であろう。同時代の歴史家ブルコピウスの記述には二人の間にドラマティックな展開は何も見られない。Procopius of Caesarea, *History of the Wars*, bk. 4, *The Gothic War*, trans. H. B. Dewing (1924; Cambridge: Harvard UP, 2000) 121-51.

(20) こうしたトティラ像には、ホジキンによる、次のようなトティラ評価がかなり参考になっていただろう。「おそらくテオドリクス以上に、東ゴート王国において最も気高いあらゆるものの典型、具現化と考えるに値する人物であった。もし彼がアタラリックやウイトゲスの立場におかれていたら、きっとヨーロッパ史に名を残す著名な人物になっていただろう。ゴート王国が存続していれば、英国人がアルフレッド大王に、フランス人がシャルルマーニュ大帝に、ドイツ人が強大なバルバロッサに認めているのと同じ高い地位をその年代記の中で占めることになっていただろう」(Hodgkin 4: 642)。